

図201 SR02 遺物出土状況 1



図202 SR02 遺物出土状況 2

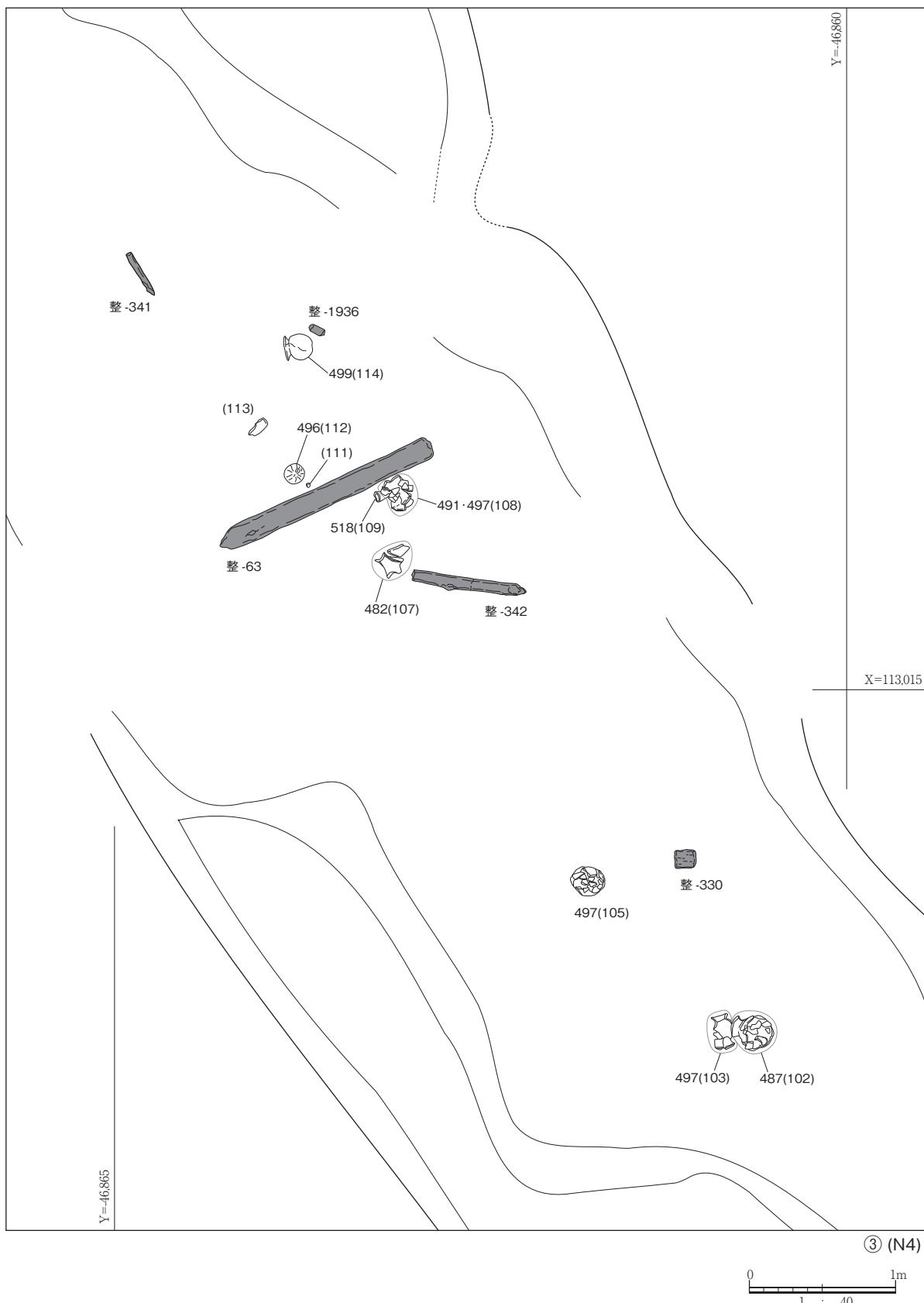


図203 SR02 遺物出土状況 3

いる。484・485・488の口縁端部内面には若干の窪みが認められる。486・487の胴部は球状を呈し、底部は丸底である。489・490は球状の胴部から口縁部が直線的、またはやや外反しながら伸びる。口縁端部は肥厚しない。491は球状の胴部と丸底の底部を有するが、口縁部を欠損する。492～495はやや厚手で口縁部が短く外に伸びるタイプである。492は口縁部付近のひずみが大きい。494は口頸部境の屈曲が弱い。496は若干尖りぎみの丸底を呈する。口縁端部は肥厚しない。497～501は球状の胴部からほぼ直線的に口縁部が外に向かって伸びるタイプである。口縁端部は肥厚しない。497の口頸部境の屈曲はやや弱い。502・503の胴部にはハケに先行するタタキが残る。整形は粗雑で器壁は厚い。502は完全な丸底ではない。503は底部にやや平坦面をもつ弥生土器甕である。弥生土器甕504も粗雑な整形で器壁も厚めである。口縁部は短く直立する。505～508は土師器甕で、口縁部が直線的または若干外反しながら外に伸びる。509は弥生土器甕の胴部下半部だろう。510～515・517～519は土師器高杯である。510～512は杯部に強弱はあるが屈曲を有する。513・515の杯部には明瞭な屈曲が認められない。516は小型器台で脚部は外に開くと推測される。517～519は脚部で、脚部上位から屈曲して裾部にいたる。519の屈曲部直上には貫通しない縦位のスリットが認められる。520は弥生土器高杯の脚部である。下位に9条の凹線文、中位に刺突文が施される。521～535は弥生土器、または土師器鉢である。521は屈曲して口縁部が形成されている。523～533はボウル状を呈する。534は鉢としたが外面のほぼ全面にはスス・コゲが付着している。535は大型のボウル状の鉢で、底部に狭小な平坦面を有する。

(3)時期 甕、高杯の多くから古墳時代前期(I-2期)の埋没と考えられる。

3 SR03 (4区-SR16・SR21)_浅谷1-A

(1)遺構(図211・212) SR03は北東へ伸び、途中からほぼ直角に北西へ角度を変えて伸びる流路で、長軸方向は北東方向がN-24° -E、北がN-60° -W、最大深度は0.45mである。埋土は複数層あるが、大きくは三つの単位でとらえられる。単位①は断面c-c'でみられる土層で、灰色の細砂層である。この土層は断面a-a'の7層と類似する。単位②は砂層の堆積で、単位③はシルト質の土層堆積である。単位②と単位③の堆積状況は、SR01の堆積状況と類似している。単位③は植物質を含む腐植土層であることから、埋没過程の一時期は一定期間の滞水状態であったと推測される。

(2)遺物(図212) 弥生土器片171点、弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器片12点、須恵器片1点、古代の須恵器片2点、土師質土器1点、石器1点が出土した。このうち、須恵器1点、土師質土器1点を図化した。

土器 536は須恵器蓋である。土師質土器皿537は摩滅が著しい。

(3)時期 図化した遺物は古墳時代後期(536)と10世紀(537)だが、古墳時代前期としたSR01に先行する点、土器片に古墳時代前期の土師器も含まれる点からSR01と同時期の古墳時代前期(I-2期)としておきたい。536・537は上層を覆う層に伴うものだろう。

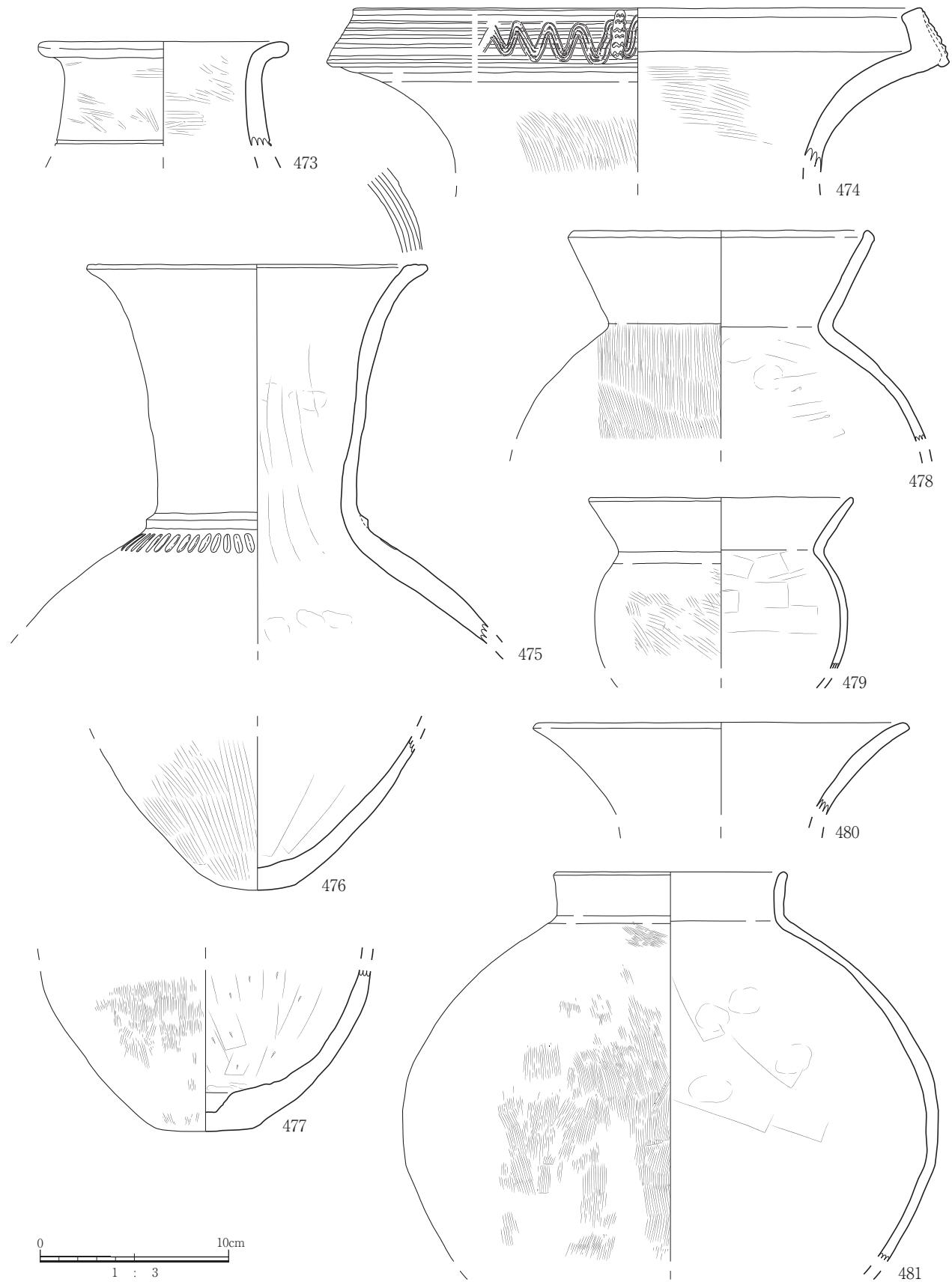


図204 SR02 出土遺物 1

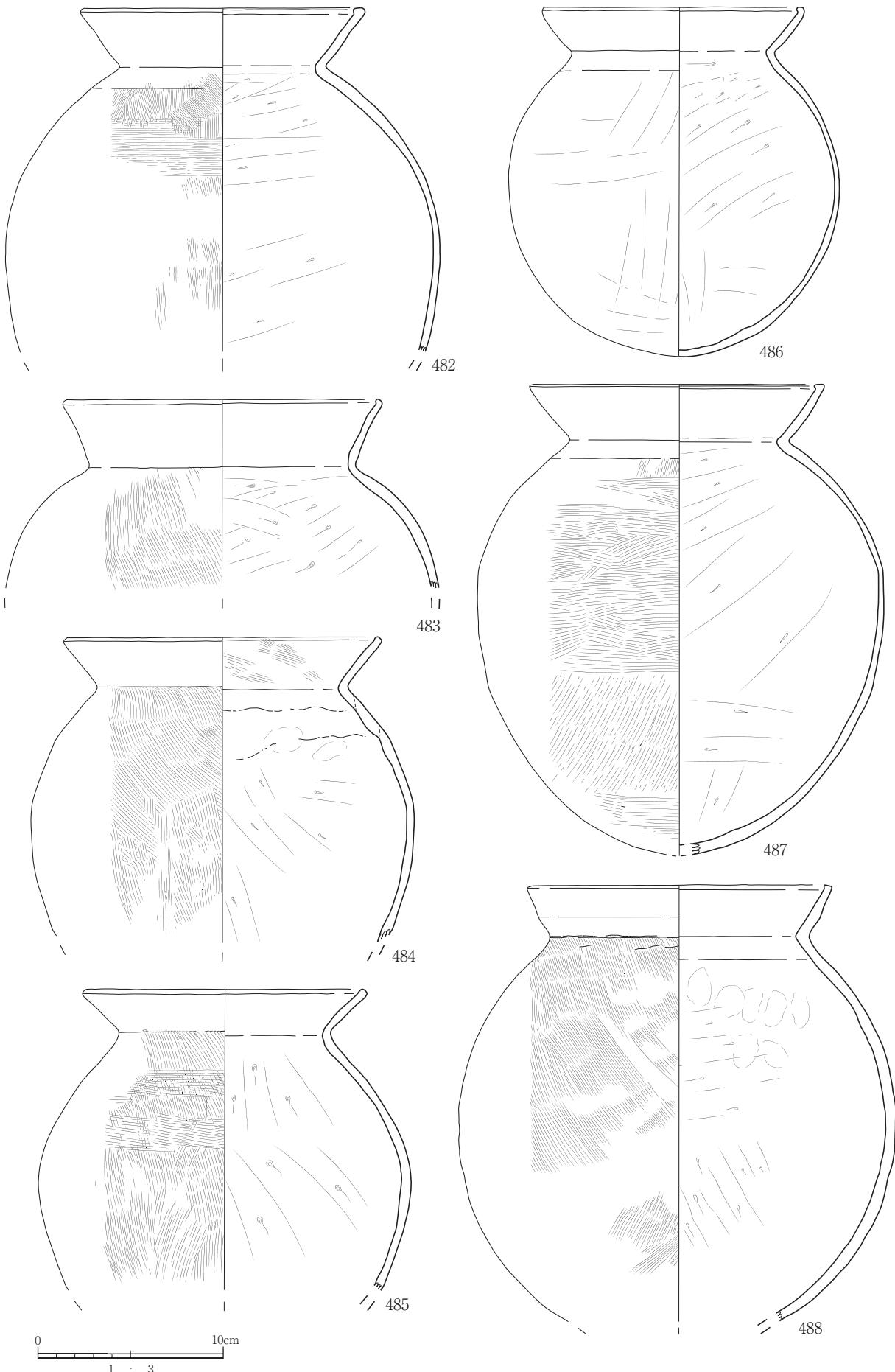


図205 SR02 出土遺物 2

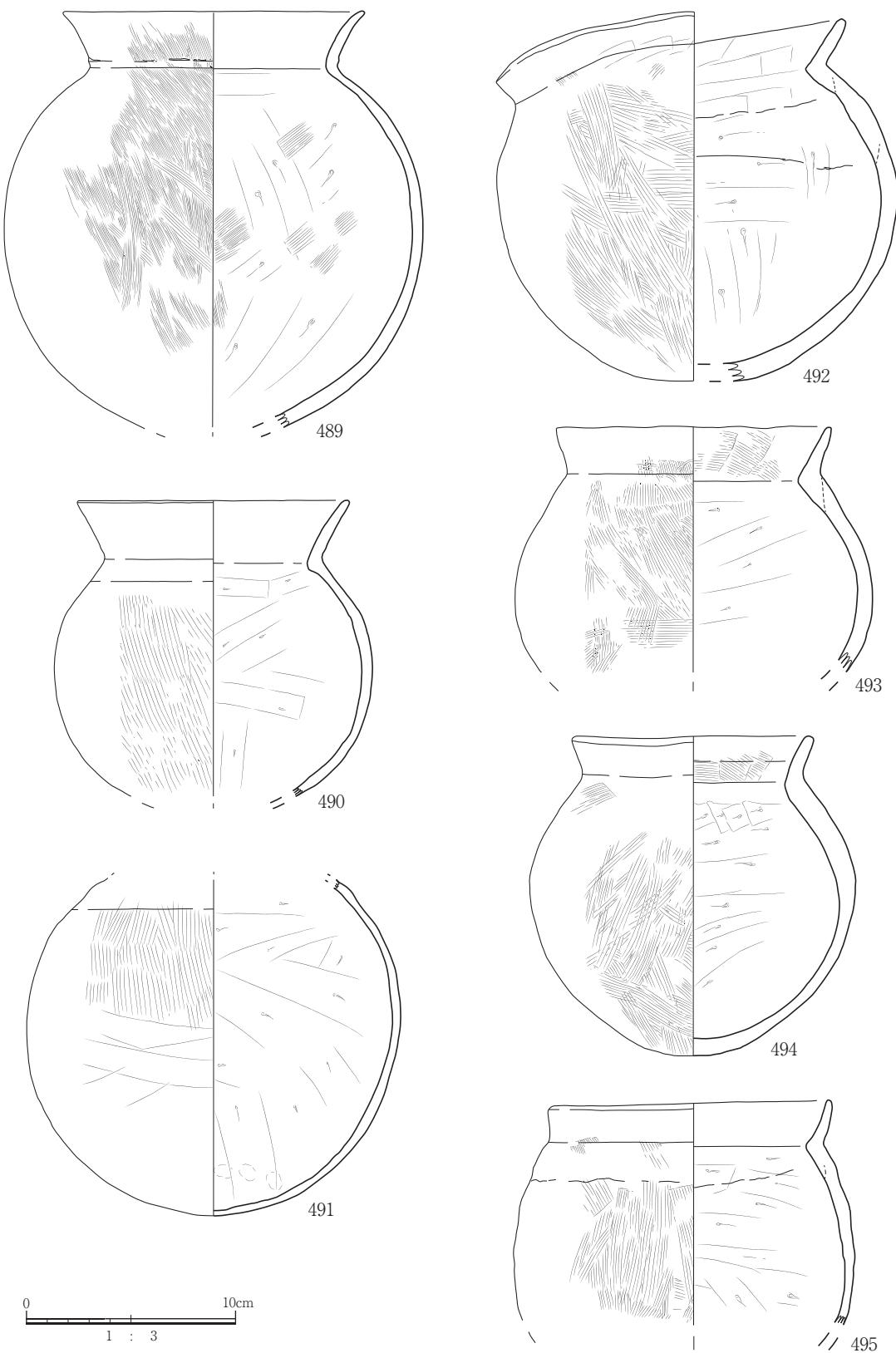


図206 SR02 出土遺物 3



図207 SR02 出土遺物 4

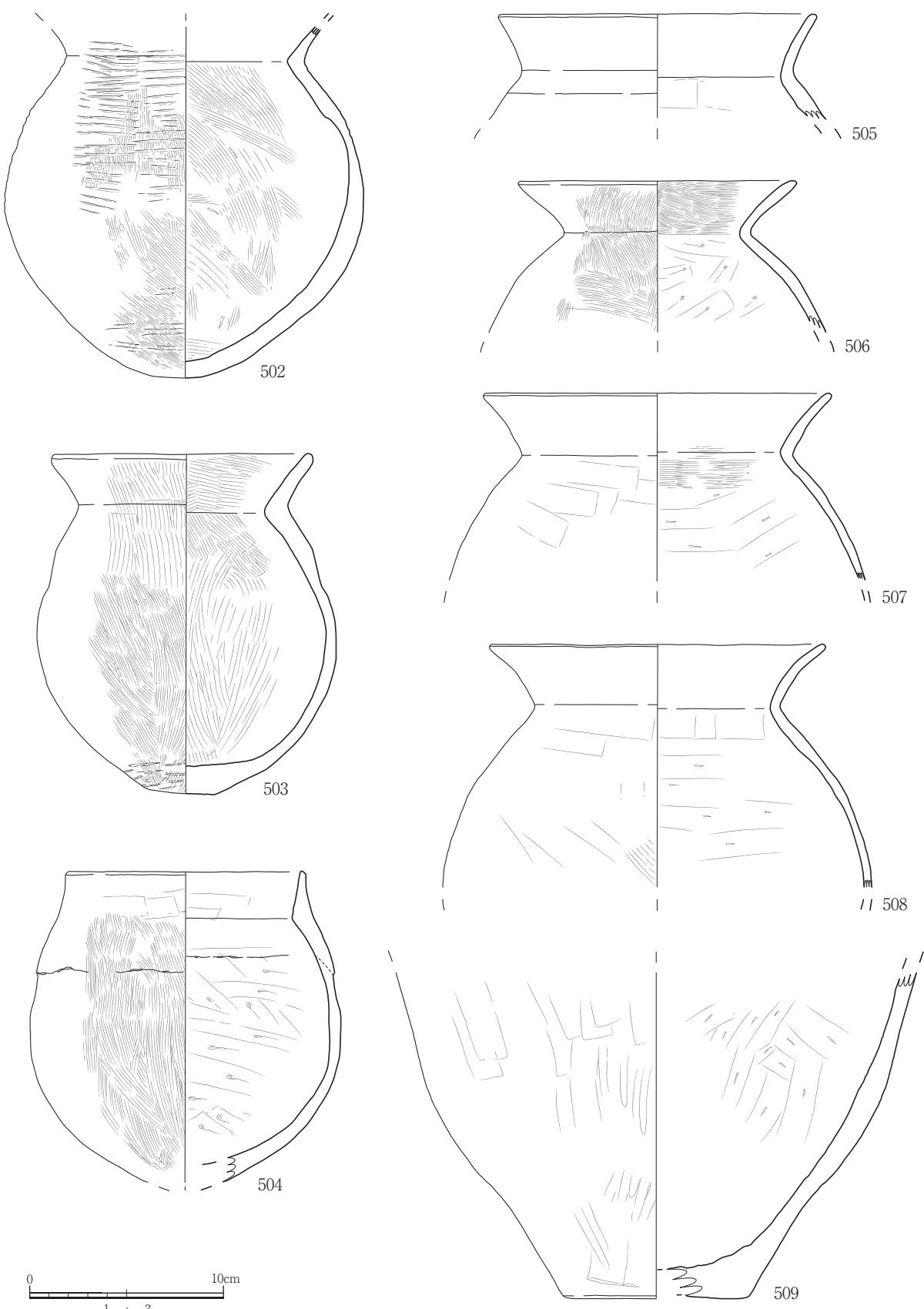


図208 SR02 出土遺物 5

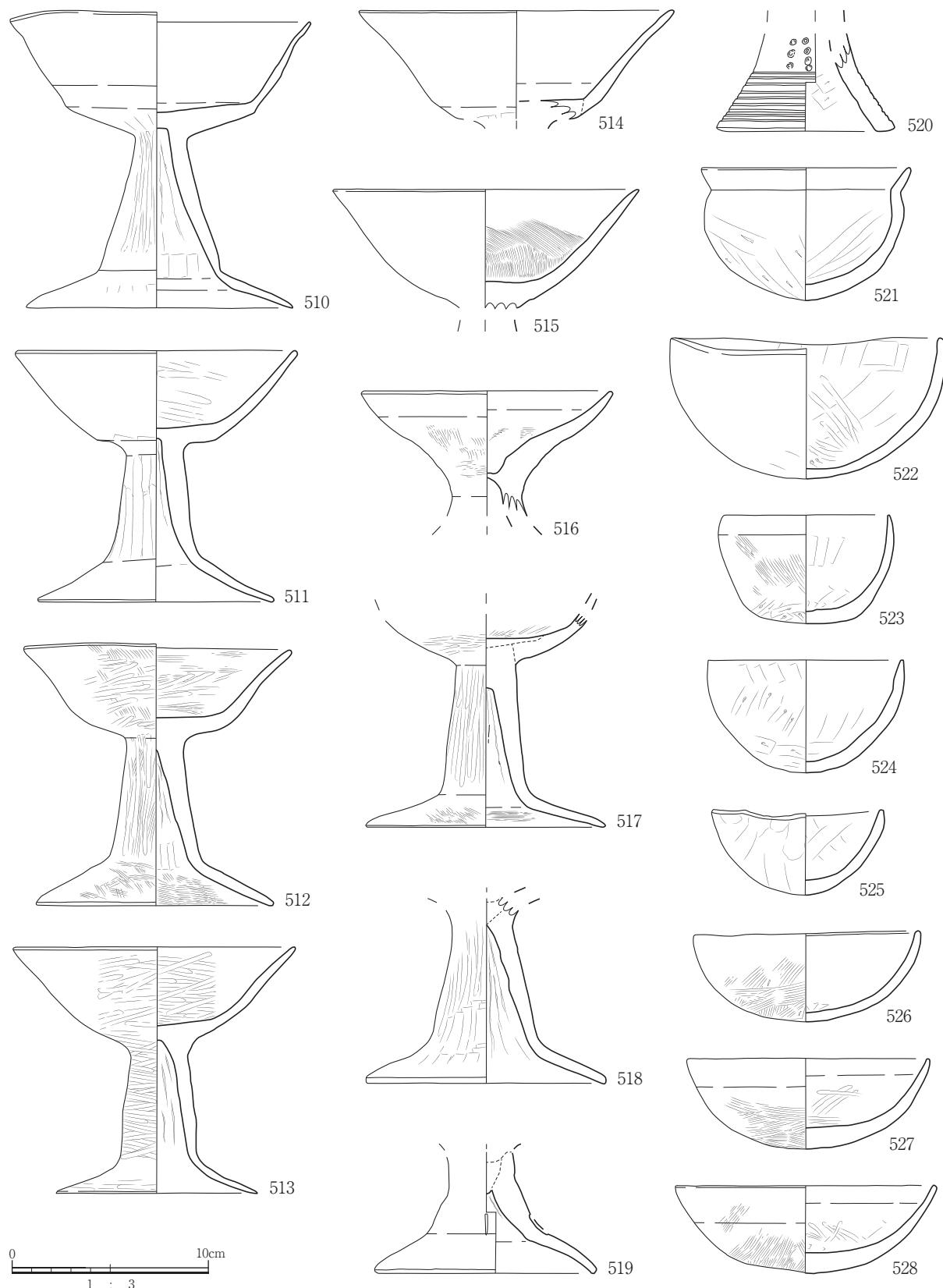


図209 SR02 出土遺物 6

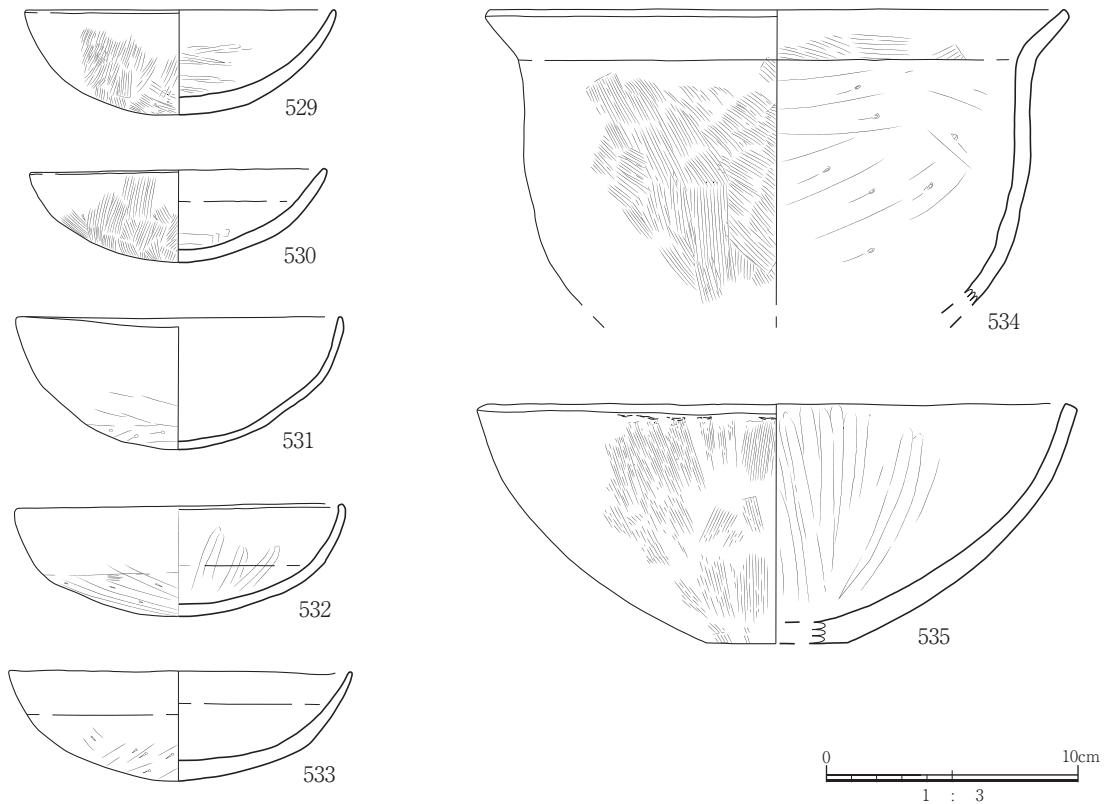


図210 SR02 出土遺物 7

4 SR04 (4区-SR19)_浅谷1-A

(1)遺構(図213~217) 緩やかに蛇行しながら北東へのびる流路で、最終的な長軸方向はN-23°E、最大深度は0.55mである。SR01とは平面図上ではほぼ重複し、SR01の底面とSR04の上面のレベルはほぼ同一であるため、両者は、SR01を上位、SR04を下位とする同一遺構の可能性がある。

(2)遺物(図218~228) 繩文土器片160点、弥生土器片6,503点、土師器片284点、須恵器片2点、古代の土師器片2点、古代の須恵器片2点、土製品1点、石器41点と木質遺物が出土した。このうち木質遺物を除く83点を図化した。

土器 538~558・561~570は弥生土器壺である。538~544は大型の壺で、539~544の口縁部内面には受口状の突帯が巡る。この突帯は愛媛県今治市阿方遺跡などでみられる大型壺の特徴である。545は広口壺の口縁部で、口縁端部外面に凹線文と刻目文が巡る。口縁部上面にも凹線文があり、その凹線文の箇所とさらに内側に円形孔が穿たれる。546は短頸広口壺で口縁端部外面に3条の明瞭な凹線文を有する。胴部最大径付近には、2段の列点文が巡り、一部では縦位に並ぶ列点文も認められる。547は大型の広口壺の口縁部で口縁端部には凹線文と刻目文、頸胴部境には圧痕文突帯が施される。548は口縁端部上部を欠損するが、残存部分とともに拡張する口縁部を形成していたと推測される。口縁端部には刻目文、頸部には矢羽根状の2段の列点文が付され

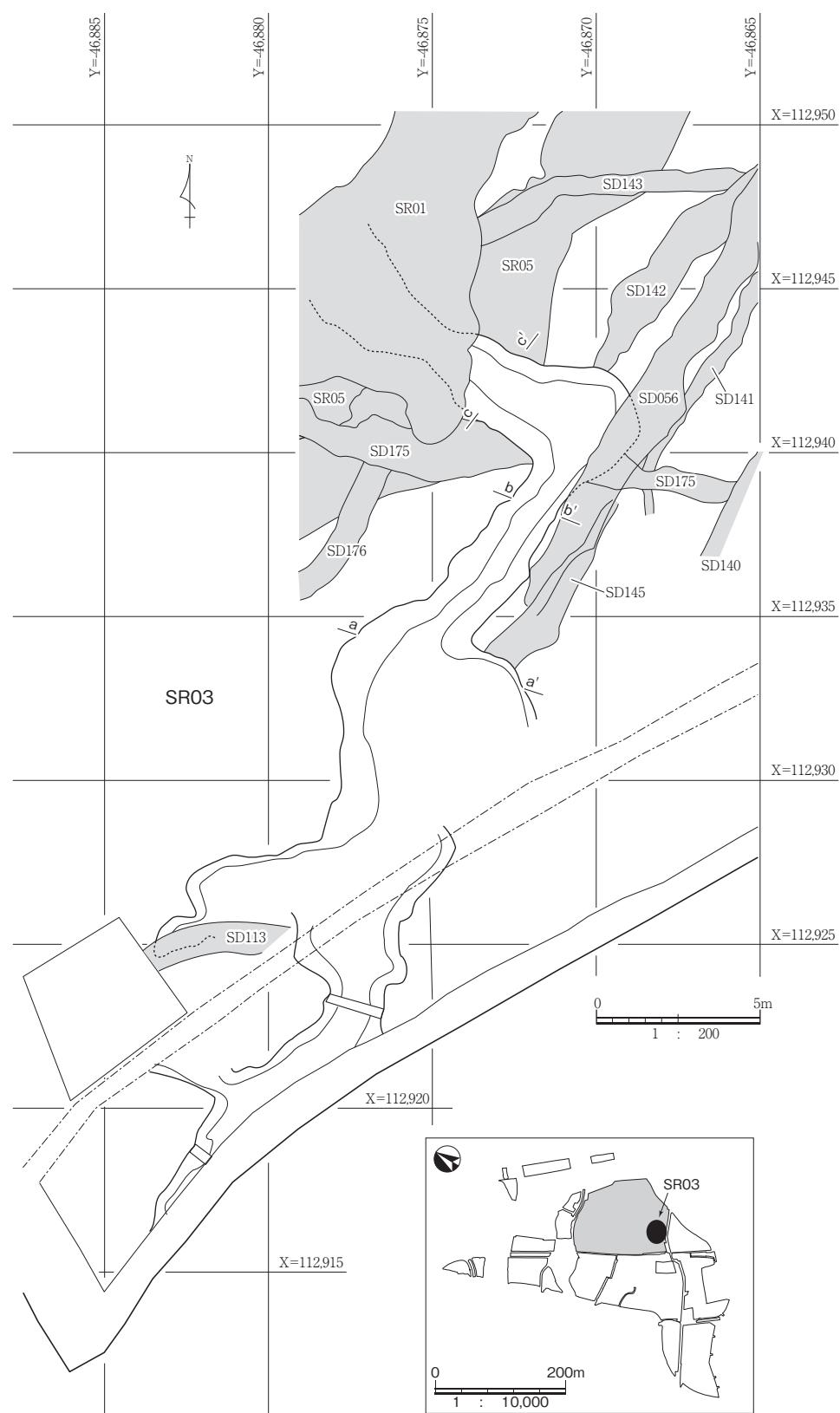


図211 SR03 平面

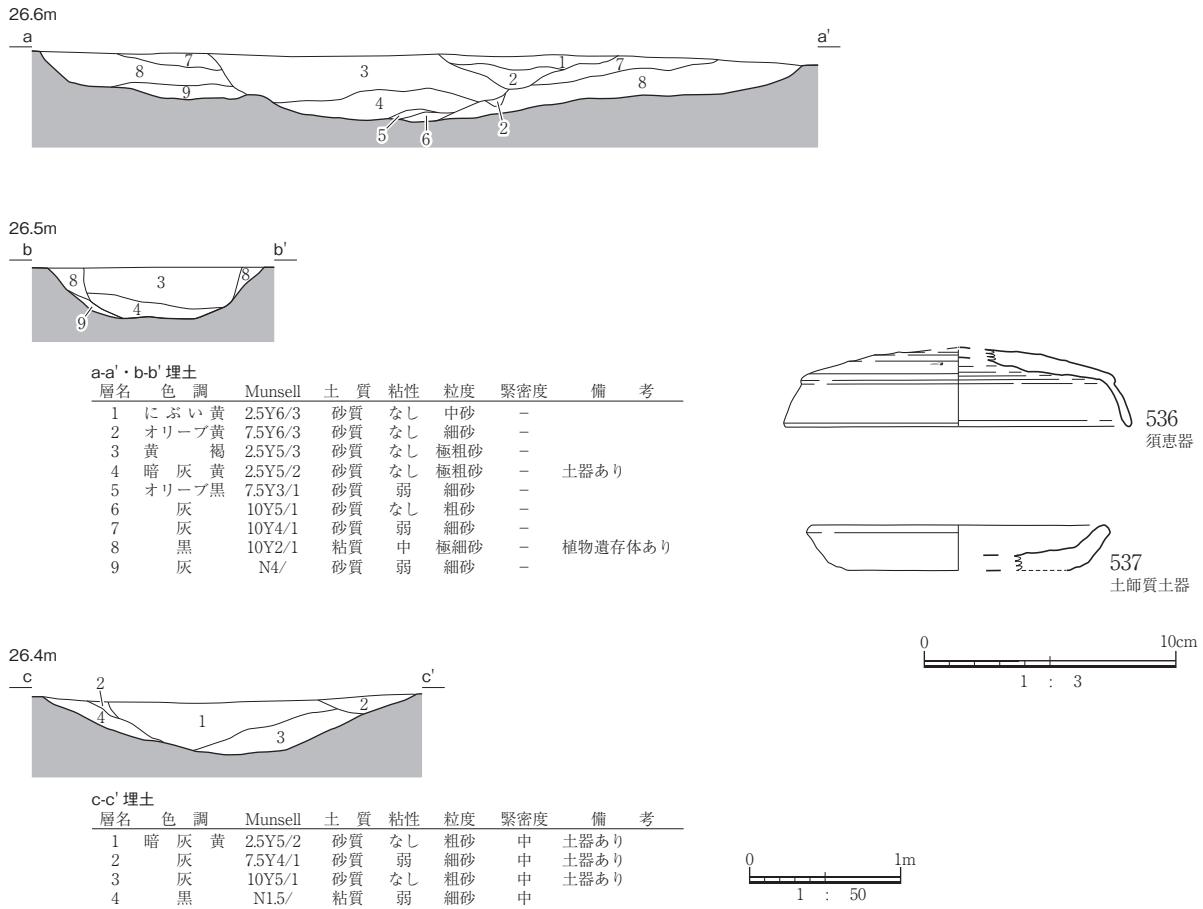


図212 SR03 断面・出土遺物

る。549～552・554の口縁部は外反しながら外に向かって開き、口縁端部は凹線文を有する。551の頸部には沈線文が螺旋状に巡る。553・556の口縁端部はさほど拡張せず、凹線文が施されない。555は頸胴部境に貼付突帯、貼付突帯直下に竹管文が認められる。557は器壁が厚く、胴部下位にはハケに先行するタタキが残る。558は厚めの口縁部上面に3列3段の竹管文が認められる。559・560は土師器壺で、560は頸胴部境に貼付突帯をもつ。561～567は複合口縁壺である。563の口縁部外面の文様は波状文が崩れたもののようにも見える。570・571は小型の壺で、570の胴部上位には列点文が巡る。おそらく、SR15出土の925・926のような小型の広口壺と推測される。572～584は弥生土器甕である。572は如意形口縁をもつ。胴部上位の沈線文は3条巡るが、うち2条は一周しない。573～579は頸胴部境の屈曲は弱い一群で、573～576の口縁端部には凹線文が残存する。580は小型で胴部がやや細身のタイプである。581は外面にタタキを多く残す。585～587は土師器甕である。585の口縁端部は肥厚する。586の胴部は球状で底部は丸底を呈する。口縁端部はわずかに肥厚する。球状の胴部をもつ587の口縁端部は肥厚しない。588～592は弥生土器高杯である。588の杯部内面のミガキは放射状と分割が併用されている。外面は分割ミガキである。589は脚部に矢羽根形透孔が穿たれている。590の脚部外面の文様構成は、上位から沈線文、

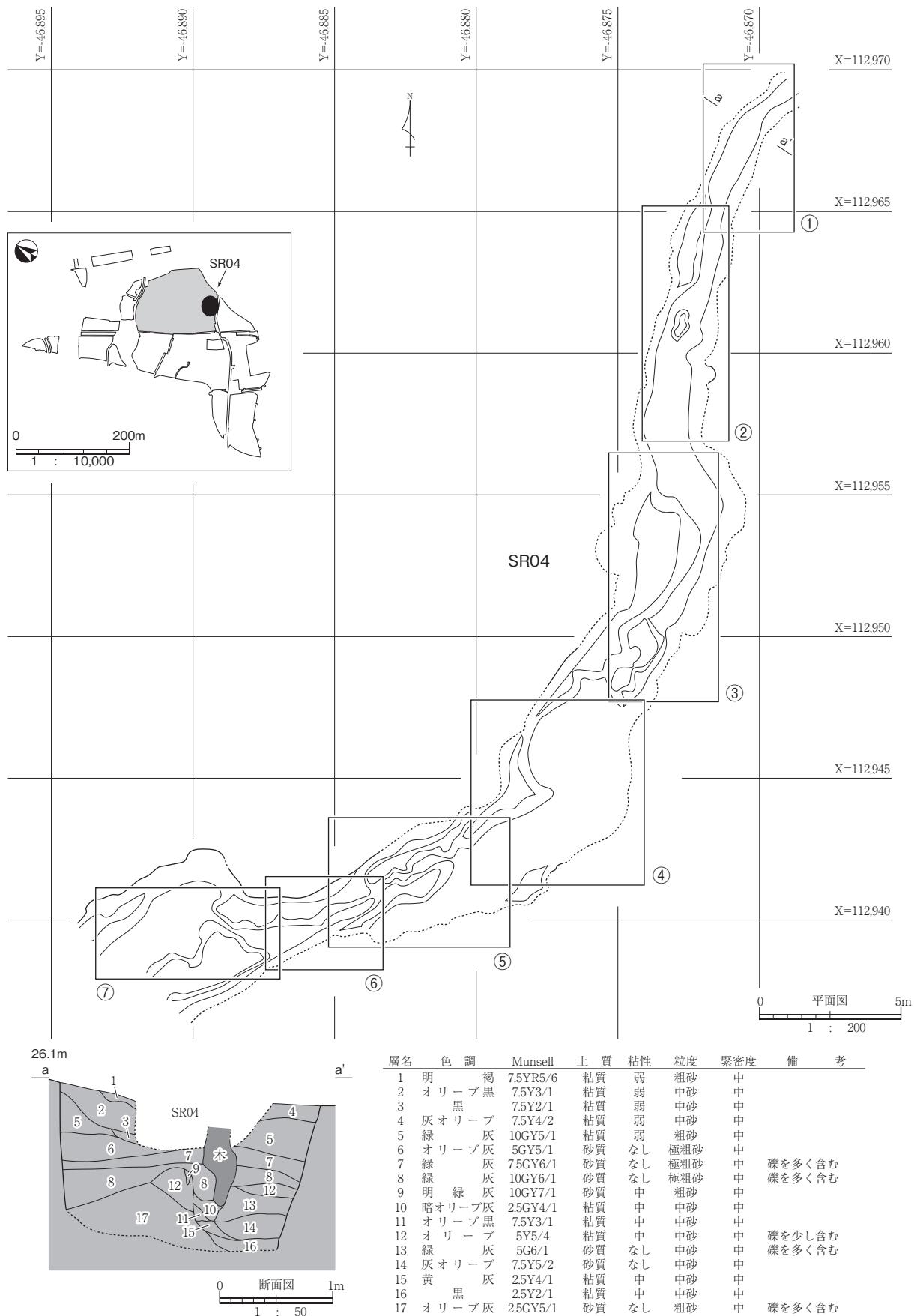


図213 SR04 平面・断面

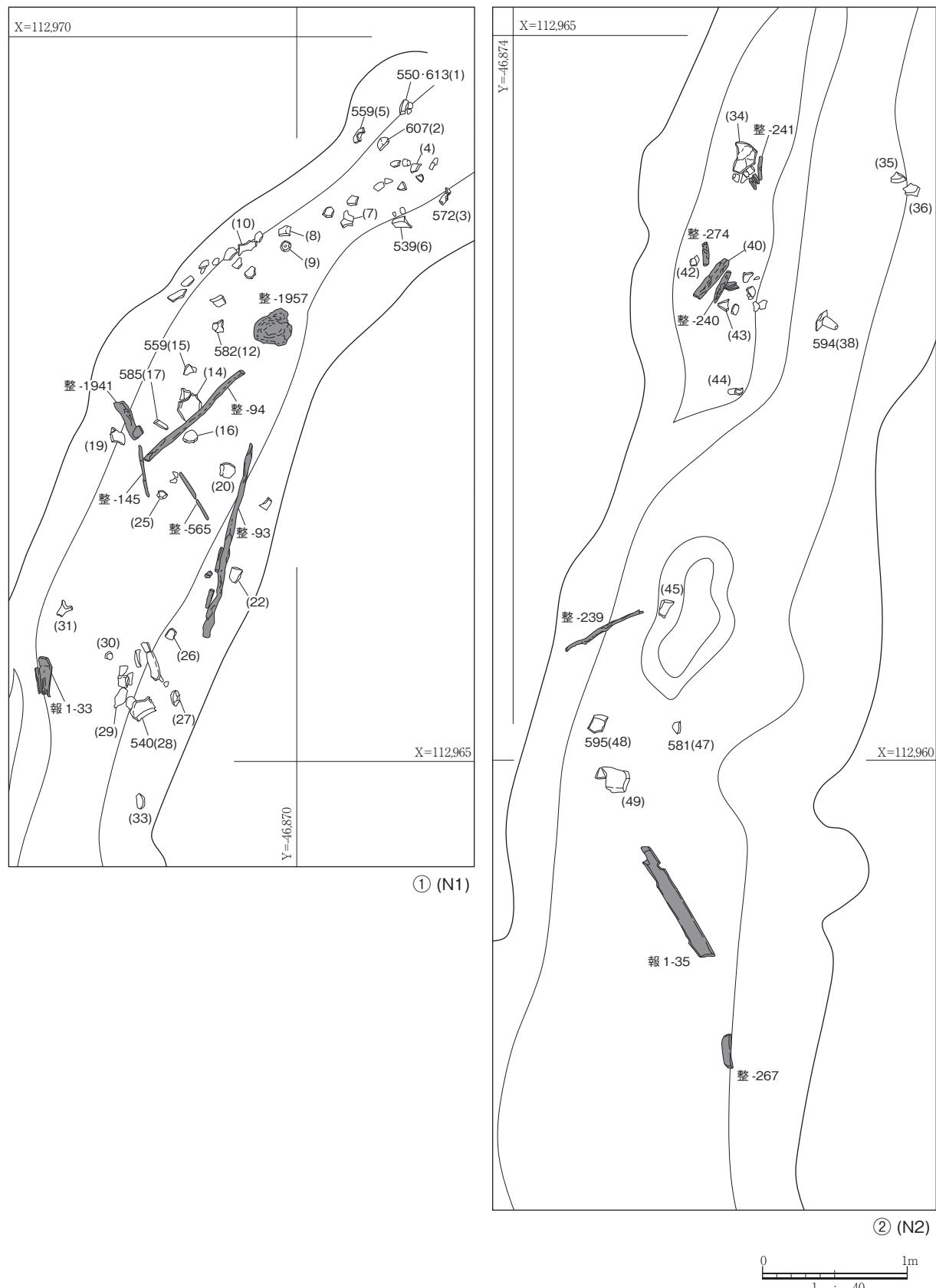


図214 SR04 遺物出土状況 1

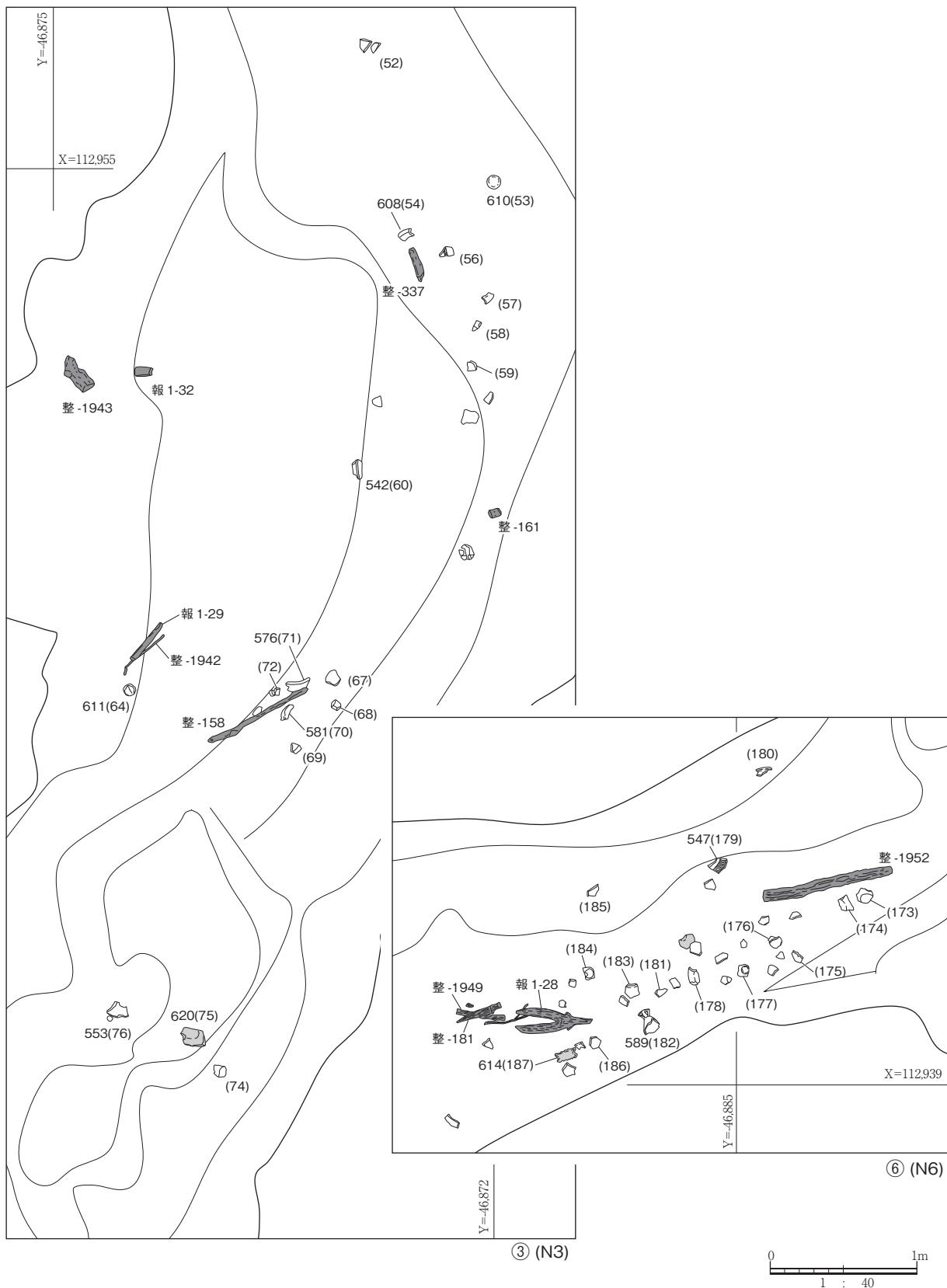
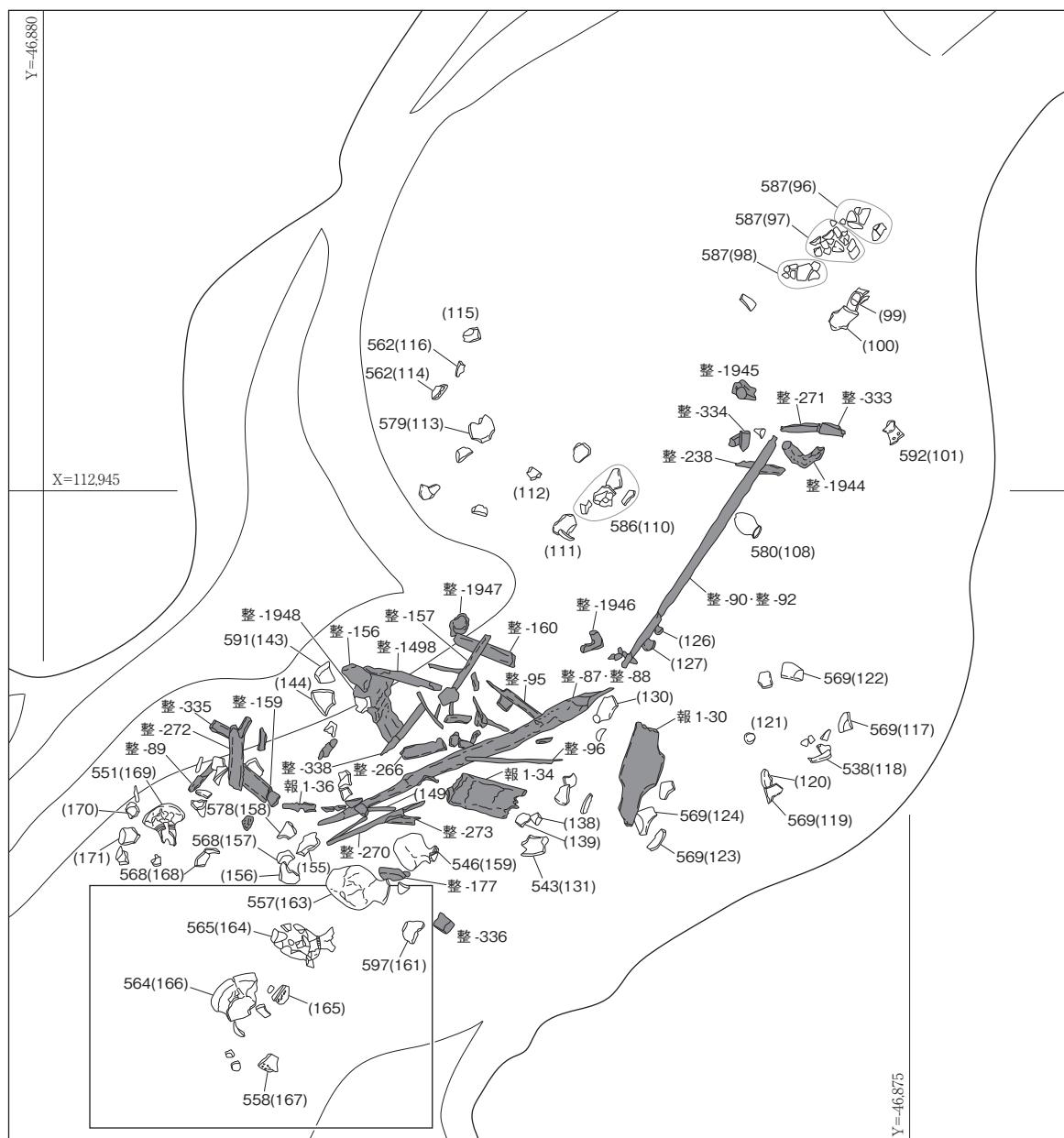
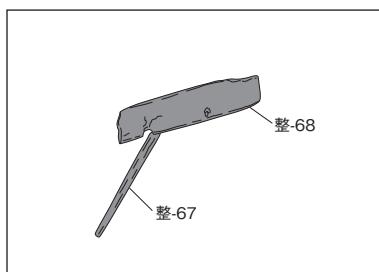


図215 SR04 遺物出土状況 2

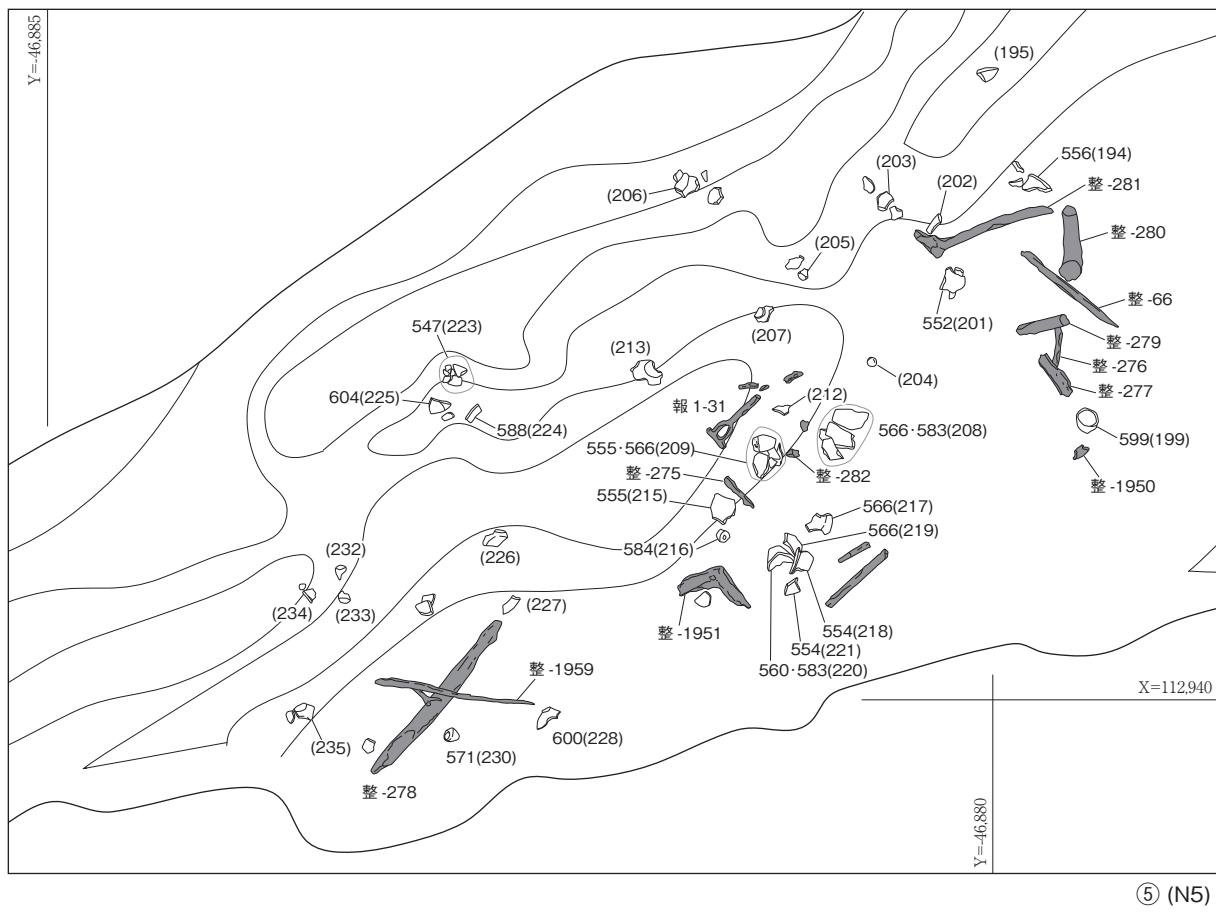


④ (N4)

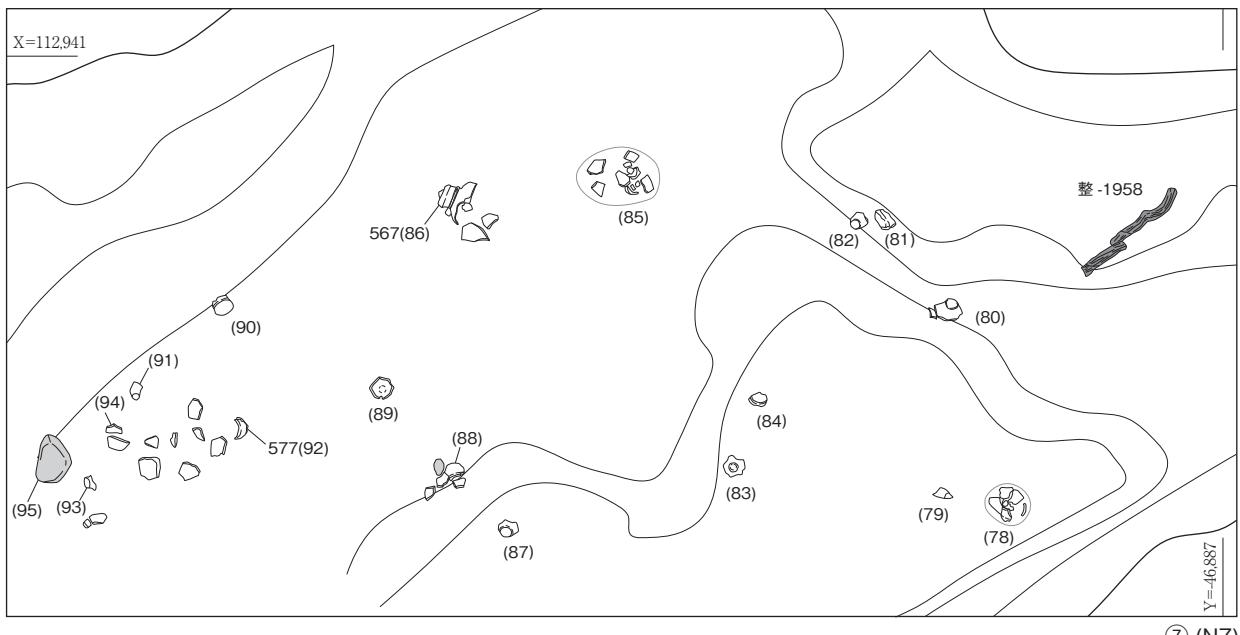


④ 下面 (N8)

図216 SB04 遺物出土状況 3



⑤ (N5)



⑦ (N7)

0 1m
1 : 40

図217 SR04 遺物出土状況 4

山形文、貫通しない矢羽根形透孔、沈線文、斜格子文、凹線文となっている。591の口縁端部は拡張し、上面に凹線文が巡る。593・594は土師器高杯である。595～612は弥生土器、または土師器の鉢である。596は緩く屈曲する頸部に円形孔が認められる。603～611はボウル状を呈する。613は内黒の黒色土器碗である。

石器 614はサスカイト製石庖丁である。背部と抉りに敲打の痕跡が認められる。素材の剥片は金山型剥片ではないだろう。615は濃緑色を呈する緑色片岩製の石庖丁で刃部、背部ともに直線

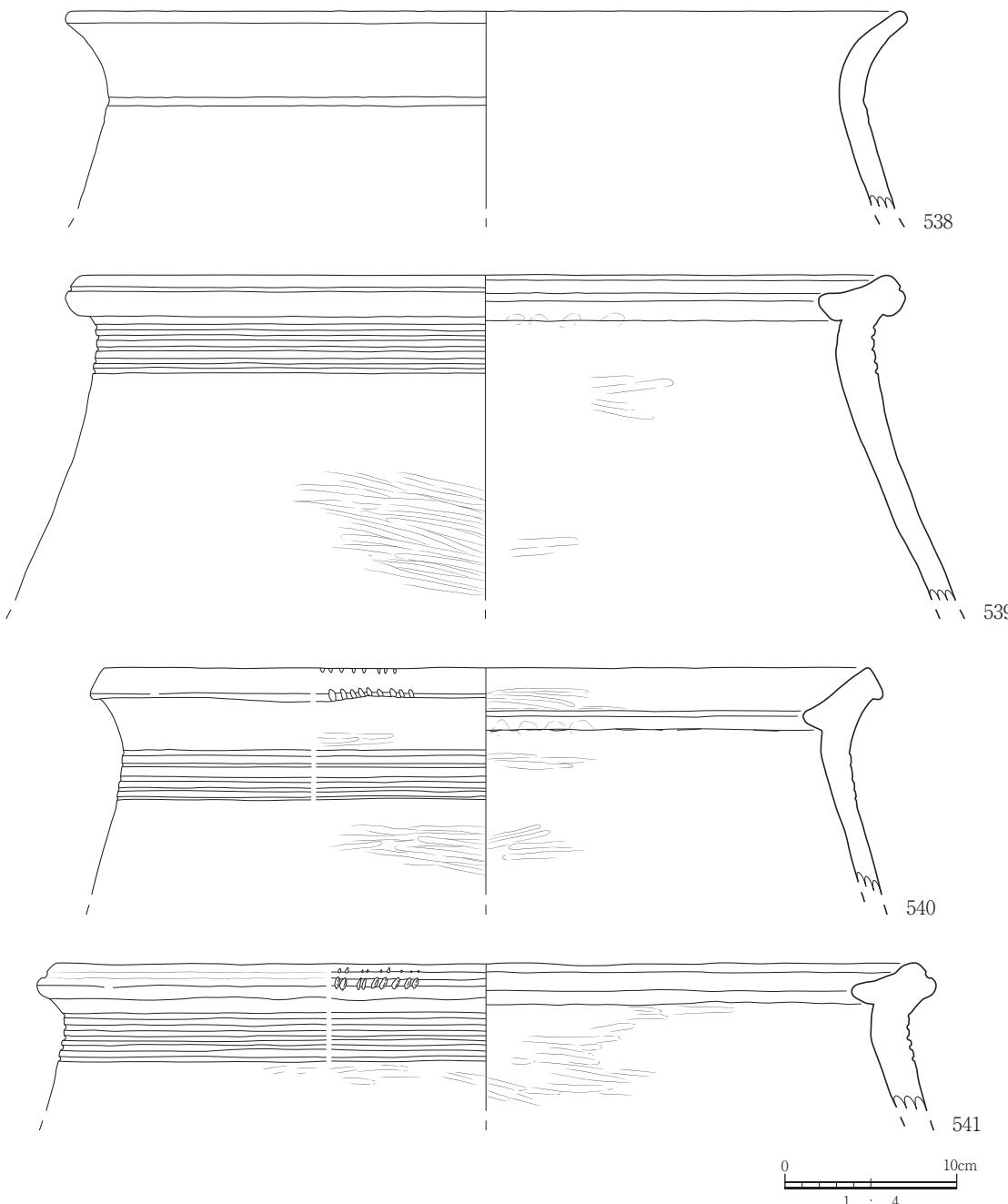


図218 SR04 出土遺物 1

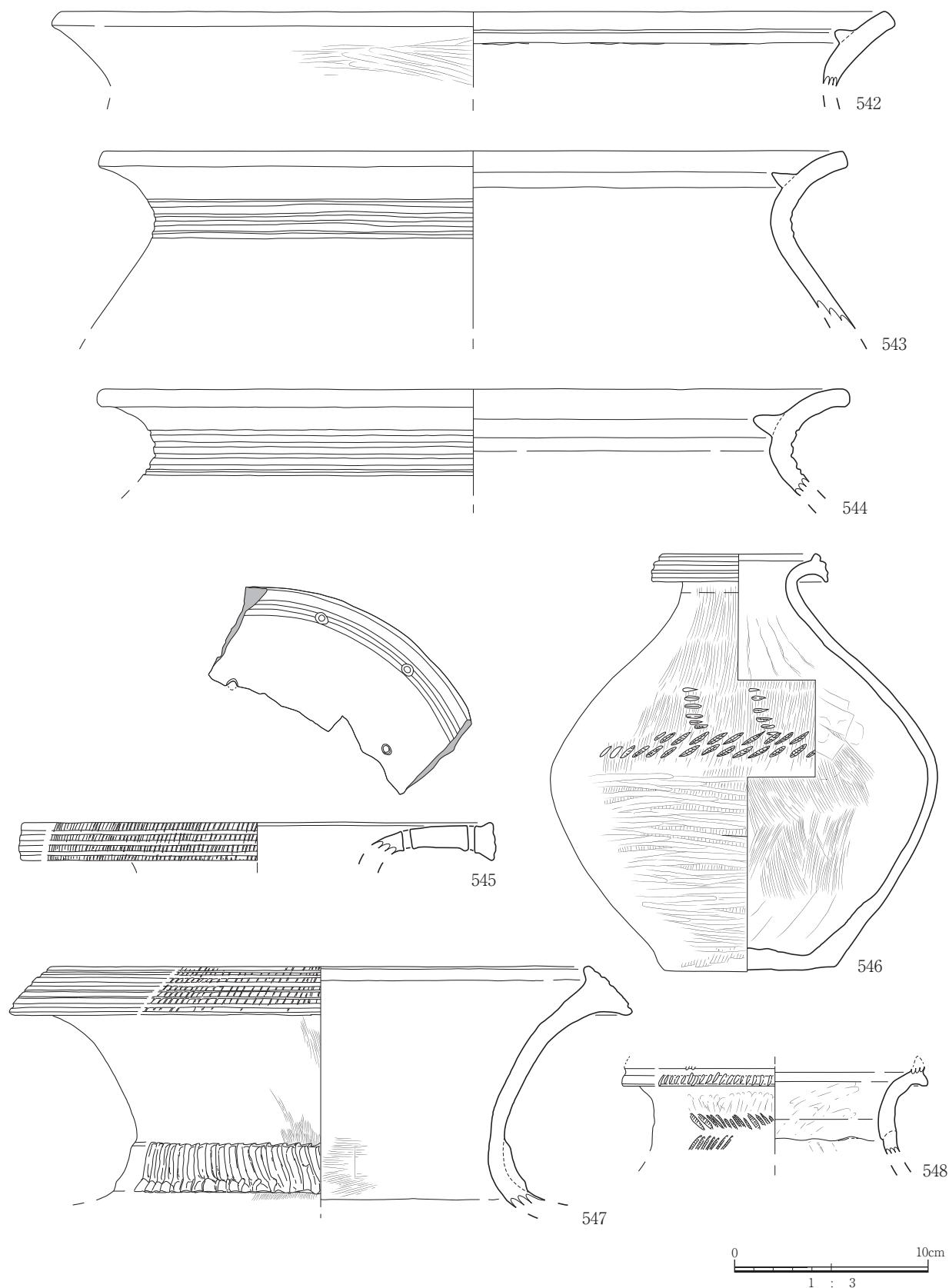


図219 SR04 出土遺物 2